

この本よんだ？

～りいふる BOOK プラス～



魂の退社 会社を辞めるということ。

稲垣えみ子 著 東洋経済新報社 2016年 (B:労働・法律)

稲垣えみ子

魂の退社

好きで飛び込んだ新聞社。その組織の中で、数多くの先輩、上司たちに育てられ、切磋琢磨して精勤し培った実力。時には、前向きに全力で走ることには意義を見出し、夢を追いかける経験もしては存分に仕事に打ち込んできた著者。

しかし、ふとした事がきっかけで、疑問を持つ。「仕事とは何なのか?」「会社とは何なのか?」と。

そして、五十歳目前で「退社」に至るのです。心の中に一度芽生えた、言葉で表現しかねる得体のしれない何かにつき動かされ、「えいっ!」

とばかりに辞めてしまったのです。

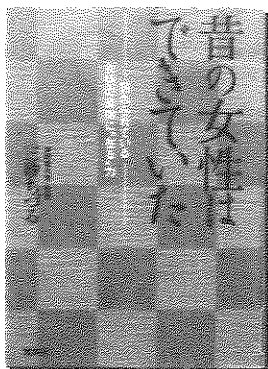
退職後、日々の生活の中でどういう事を実体験していったかということが丁寧に綴られていて、著者の心の内が手にとるように推測され、興味深く読み進められました。

人は道に迷う時、自分の価値観をどのようにして、納得のいくように軌道修正して生きていけばよいのかと考えさせられました。

(すす子)

昔の女性はできていた－忘れられている女性の身体に”在る”力

三砂ちづる 著 宝島社 2004年 (G:からだ)



男性にはわからない話であるが、妊娠できる女性には毎月月経があります。現代女性は生理用ナプキンなどをつかって処理していますが、それは洋服になった明治時代以降の近代の話で、着物をきていた昔の人はどうしていたのか？ということ聞き取り調査しています。

その中から「月経血コントロール」をしていたという答えにたどりつき、今でも骨盤底筋を鍛えればできるという婦人科の先生や体操の先生の検証と実際の体験談もあり、昔の人の知恵はすごいなということがわかる研究書です。 (か)

人はいくつになっても美しい

ダフネ・セルフ 著 幻冬舎 2016年 (K:エッセイ・文学)

著者はイギリス人で90歳の現役モデルです。年齢にとらわれない、年齢はただの数字。健康な体、心、笑顔こそが美しさへの一番の近道であると言っています。

自然にさからうことなく、ありのままに生きるのが美しい。正しい姿勢と自信が洋服をきれいに見せる。流行は追うのではなく取り入れるとも。

さあ、あなたも少しおしゃれをして、いつもの場所へ出かけませんか。

この世は知らないことにあふれています。今日を思う存分楽しみましょう。

表紙の著者の凛とした美しさを手にとってご覧ください。 (は)



鏡の背面

篠田節子 著 集英社 2018年 (K:エッセイ・文学)

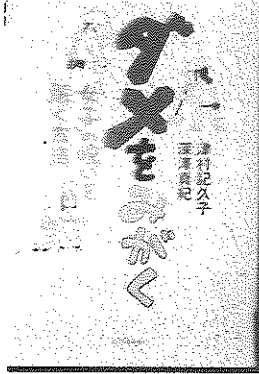


人格や自己意識は、人工的に変えられるのか？善とは、悪とは何か？深い命題を突きつけられる力作です。様々な障害で苦しむ女性達を救う聖女が別人だったという謎に、皆がそれぞれの立場で挑みます。その過程で、DV、アルコール、薬物依存、ひいては、貧困や医療、詐欺など社会的問題、日本人の深層に潜む男尊女卑のような精神性にまで、自然と問題点が浮かび上がり、考えさせられます。

表紙のラザロの蘇生のように、人は生き直すことができるのでは、という希望と、本当の光は天からではなく、土の底から差し込むという示唆には強く共感します。 (I.K)

ダメをみがく "女子"の呪いを解く方法

津村記久子 深澤真紀 著 紀伊國屋書店 2013年 (E:こころ・癒し)



本書の著者である津村さんは芥川賞作家、深澤さんはコラムニスト、編集者としてそれぞれに活躍されています。タイトルから連想されるような「ダメ」な方たちではありません。また、本書の中身もネガティブなものではありません。全体が著者のお二人の対談形式で、実用的で建設的な内容です。具体例を少し挙げると、「メンタルじゃなく環境を変えよ」とか「ある程度年取ったら教える側に回るべき」などです。

読む人それぞれの生活や仕事の体験に基づいて納得したり、痛いところを突かれるような箇所が出てくるとおもいますので、ぜひ一読して引っかけを探していただきたいです。(A.T.)

東京セブンローズ

井上ひさし 著 文芸春秋 1999年 (K:エッセイ・文学)



世の中がキナ臭くなるごとに井上ひさしを思い出す。もし彼が生きていたら今の日本についてどう考え、どんなアクションを起こすのだろうか。本書は東京根津の団扇屋主人である山中信介なる人物の日記という形を取りながら戦時中及び終戦直後の世相が詳細な資料を基に描かれている。

780ページの大作であり、しかも旧仮名遣いで難読漢字も混じる。それでも読み始めるとそれこそ寝食を忘れてしまう面白さ。NHKの朝ドラとは異なる当時の日本がそこにある。戦争とは、平和とは、天皇制とは、GHQの占領施策とは、そして日本語とは何か。平和を愛するみなさんにお薦めの一冊。(紀生)

ーりいぶるぷらすのあゆみー

私達は和歌山県男女共同参画センターりいぶるの情報センターにある図書・絵本・マンガ・DVDなどの魅力を紹介する書評誌を作るボランティアです。

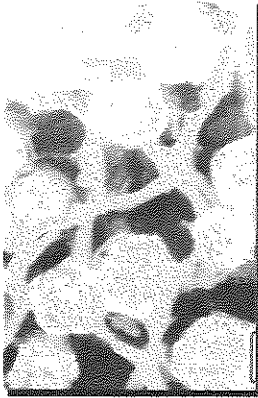
2008年にりいぶるがボランティアを募集し、約40名が活動していましたが、2012年4月「りいぶるBOOKこれ読んだ」12号で活動を終了しました。

やっぱり、ないと寂しいという声に集まった7人から、2012年12月「この本よんだ?~りいぶるBOOKプラス~」を発行し、再出発しました。初めは、年3回でしたが、現在は年2回発行となっています。

りいぶるは20周年をむかえますが、りいぶる主催のボランティアが4年、りいぶるぷらすになってから7年。気がついたら、11年も私達はボランティアしていたのです。

忘れる女、忘れられる女

酒井順子 著 講談社 2017年 (K:エッセイ・文学)



酒井順子氏は、「負け犬の遠吠え」で名を馳せた作家。本書は週刊現代に連載中のコラム「気付くのが遅すぎて、」(2016年7月～2017年5月までの約1年分49本)を掲載したもので、これで12冊目となる。

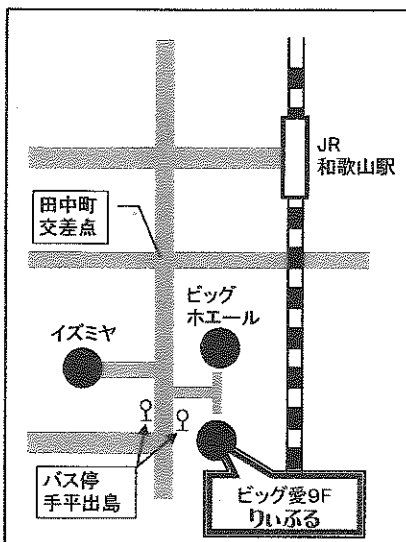
週刊現代と言えば、男性サラリーマンが主な読者層の総合週刊誌である。そんな中であって女性作家としてコラムを途中タイトルを変えながら14年も続けている。取り上げる内容は時事ネタ、政治・芸能人スキャンダル、ワイドショーを賑わす事件など様々だ。例えば、STAP細胞の小保方さんの会見時の髪型に言及したり、タイで逮捕された山辺節子容疑者のファッションについて触れてみたり、女性ならではの鋭い切り口が魅力である。それでいて、男性読者に不快感を与えないようにうまく抑えられた表現が実に巧みと感じる。また、それが連載が長続きする秘訣なのかも知れない。性的な話題も真正面から取り上げるが、決していやらしさを感じさせない。作者の酒井氏は1966年の生まれで、週刊誌の読者層である同年代の諸氏にとっては懐かしい話がたびたび飛び出し、共感することもしばしばであろう。

作者あとがきには、スキャンダルが永久に残るネット時代を憂うとともに、「忘れることが幸福につながるように、忘れられることもまた、新たな世界への入り口」「せめて自分だけは、他人の失敗をも忘れる人でありたい」と綴り、本書のタイトルに繋げている。

(O.S)

※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第18号 (2019年3月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

りいぶる20周年イベント(3/2)に私達も参加します。表紙の絵もTONOさんにイメージしてもらいました。今号より、紀の川平野で育った本好きの「すす子」と、俳句・マラソンや多方面で活躍中の「紀生」さんが加わりました。介護・育児で休まれた方も復帰してにぎやかです。

次号は2019年10月発行予定です。

★あなたも書評を書いてみませんか? ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。E-mail libreplus@yahoo.co.jp